続 道ありき

この土の器をも

わが結婚の記

三浦綾子

続道ありき

この土の器をも

わが結婚の記

三浦綾子

埼玉県立熊谷
昭和46.10.16 受入
図書館蔵書

もし落丁、乱丁などがございましたら、おとりかえします。お買い求めの書店か本社へお申しいでください。

続道ありき
この土の器をも
——わが結婚の記——

定価　四三〇円

昭和四十五年十二月五日　発　行
昭和四十六年　五　月十五日　第八十版発行

著者　三浦綾子
発行者　石川数雄

著者との了解により、検印を廃止いたします

印刷所　明善印刷株式会社
（オフセット）凸版印刷株式会社

発行所　株式会社　主婦の友社
郵便番号一〇一
東京都千代田区神田駿河台一の六
振替東京一八〇番
電話東京(294)一二一一(大代表)

© 三浦綾子　1970　Printed in Japan　0093-520072-3062

「わたしたちは、この宝を土の器の中に持っている。
その測り知れない力は神のものであって、わたしたち
から出たものでないことが、あらわれるためである。」
（新約聖書、コリント人への第二の手紙第四章七節）

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

一

青春とは自己鍛練による、自己発見の時だと、臼井吉見氏は言っておられる。

わたしの青春の記「道ありき」は、確かに自己発見の記録であった。その自己は、愛と信仰の告白をなす自己であった。

これから書きつづけるこの記録も、わたしたち夫婦の、愛と信仰の告白と言ってもいいだろう。わたしはこの中で、結婚生活とは何か、家庭を築くとはどういうことか、夫婦のあり方はどうあらねばならぬかを、自己に問いつづけながら書き綴ってみたいと思う。

手を伸ばせば天井に届きたりきひと間なりき
吾等が初めて住みし家なりき
吾が部屋の屋根裏は隣家の物置にて
下駄響かせて歩く音する

こう三浦の歌ったわたしたちの新居は、旭川市の九条十四丁目左九号にあった。わたしの実

家から僅か二町半ばかりの所である。この家は、わたしたちが結婚するまでは、五男坊の弟の家だった。弟は、隣家の棟つづきになっている物置を借りて改造したのである。それはたったひと間の家だった。

だが、ちゃんと格子戸のついた玄関もあるし、独立した台所も便所もあった。しかも玄関は、通りから七、八メートル引っこんでいて、向って左手に、石炭三トンは入る大きめの物置があり、右手は板塀を廻した美しい隣家の庭になっていた。そしてこの庭は、わたしの家の玄関からみても、ひと間っきりの部屋の窓からみても、あたかも自分の庭のようにみえた。その庭の植込の向うに通りがあるので、いかにもひっそりとした、静かな家だった。

台所は四畳ほどで、わたしはそこを、弟から借りた食器棚で区切り、玄関の取次と、台所に分けて使った。

この小さな私たちの家をかばうように、家の裏手に大きな胡桃の木が立っていて、吾が家を覆っていた。高さ十メートルはあったと思う。そしてまた台所の窓からは、他の一方の隣家の庭が見えて、スモモの木があった。

結婚第一夜があけた朝、わたしは台所に立って、ふと窓の外をみた。隣家のスモモの木が花盛りで、真っ白に咲き匂っているのが印象的だった。その時の感動をどう伝えたらいいだろう。三浦とわたしは、スモモの花の咲き匂う美しい季節に結婚したのだ。そう思っただけで、

わたしは涙ぐんだ。

これからの結婚生活もまた、このスモモの花のように、地味ではあっても、どうか香りある清純なものでありたいと、わたしは切実に祈らずにはいられなかった。

結婚する前に、わたしたちは旭川六条教会の中嶋正昭牧師から、こう教えられていた。

「結婚したからといって、翌日からすぐに夫婦になったといえるものではない。わたしたちが真の夫婦になるためには、一生の努力が必要である」

この言葉が、結婚第一日目の朝、鮮(あざや)かにわたしの胸に浮かんだのだった。しかし、何をどう努力してよいのやら、まだ皆目見当のつかないわたしである。わたしは昨夜の祈りを思った。昨夜、三浦とわたしは、洋タンスと和タンスと三浦の机が並んだ狭い九畳間に、二人で床を敷いた。そして、正座して、心からなる感謝の祈りを神に捧げたのであった。

足掛五年、三浦はわたしの病気のなおるのを、ひたすらに待っていてくれた。それはまことにひたすらなるものであった。上司や知人の勧める、美しく若い花嫁候補をも、あるいは直接愛を打ちあけてくれた人をも、三浦は退けて、ただギプスベッドに臥(ね)ているだけの、年上のわたしをじっと待っていてくれたのだ。

三浦は、どこに出張するにも、常にわたしの写真を携えて、いつの日かこの地に共に来れるようにと、祈りながら出張してくれたのである。その長い年月の彼の愛が、いまあらためて、

わたしの胸に迫って来る。わたしは両手をついて、
「ふつつかな者ですけれど、どうぞよろしくおねがい致します」
と、厳粛な思いで挨拶した。そして二人は正座して祈った。
「神様、きょうの喜びの日をお与えくださいましたことを、心から感謝申しあげます。きょうより一体となって、神と人とに仕える家庭を築き得ますように、わたしたちをお導きください」
祈り終った二人の目に、涙が溢れていた。やがて三浦は、
「疲れているだろうから、きょうは静かにお休みなさい」
と、やさしくいたわってくれた。そして、わたしに指一本ふれることなく、口づけもかわさずに、三浦は自分の床に入った。それはいかにも静かで、いかにも敬虔な夜であった。わたしは深い安らぎを覚えた。だが一方、この結婚第一夜に、せめて記念の口づけだけは欲しいと思った。それは肉的な思いとはちがっていた。
誰かは言った。
「夫婦生活の根本は、性生活である」
と。その言葉がふと頭に浮かんだ時、わたしはたちまち、この握手も接吻もない夜が、極めて好ましいものに思われた。これでいいのだと思った。わたしたちの結婚生活を象徴しているような夜だと思った。

わたしは、夫婦の結合が肉体のみにあるとは考えたくなかった。やはり祈りによる人格と人格の結合が、根本であらねばならぬと思っていたからである。

そんな昨夜のことを考えながら、わたしは白っぽく乾いた朝の流し台に、ポンプの水を一面に流したのだった。

わたしたちは新婚旅行に出なかった。体の弱いわたしにとって、結婚式に引きつづき、旅行することが無理だったからだけではない。多分健康だったとしても、わたしは新婚旅行を拒んだであろう。わたしは、小さくても自分の新居で、安らかに眠り、安らかに目覚めたかった。

まな板もないままに、わたしは鍋の木のふたの上で、大根やいもを刻みながら、楽しかった。三浦は、本棚の本を片付けたり、押入を整頓したり、小まめに動いてくれている。三日間の休暇を取った三浦と、ただ二人同じ屋根の下にいるだけで、わたしはじゅうぶんにしあわせだった。

小さな家はありがたい。トイレにいても、玄関にいても、声が聞えるのだ。

「小さい家はいいな、小さい家はいいな」

トイレの中の三浦と話しながら、わたしは幾度かそう呟いた。いま思い起しても、なんと初初しい、楽しい感情であったことだろう。

「初めの愛から離れてはいけない」

という言葉を、いまわたしは思いながら、これを書いている。

結婚三日目ぐらいだったろうか、東京に住む文通の友、小川泰代さんから小包が送られて来た。包みの中には二つ折りの、葉書大程の画用紙がたくさん入っていた。いぶかりながらそれをひらくと、グレーと赤で編んだレースの十字架の栞が貼りつけてある。そして、

「この画用紙に、あなたがたの好きな聖書の言葉を書いて、結婚式におせわになった方々に、さしあげたらいかがでしょう。わたしのささやかなお祝です」

と書いた紙片も入っていた。

小川泰代さんは、戦前麹町に大きな家を持つ資産家のお嬢さんだったが、戦争によって運命が一転した。弱い体でありながら勤めに出、お母さんを扶養していられたのである。確かわたしと同じ年頃である。

「疲れてくると、わたしはこの十字架を、祈りながら編むのです」

ある時の手紙に、彼女がこう書いていたのを覚えている。療養中だったわたしは、この言葉に、どれほど励まされたことだろう。人間誰しも、疲れると不機嫌になり、怠惰になりやすい。にもかかわらず、彼女は疲れてくると、一人一人のために祈りながら、十字架の栞を編むのだ。

こうして彼女は、疲れたその指先から、幾百幾千の栞を生み出して行った。一定の数になる

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

と、彼女は祈りの言葉と共に、全国各地の結核療養所に、癩園に、刑務所にと、次々にこれを贈っていたことを、わたしも知っていた。

この十字架は確か、クリスマス用品の販売元から、一個八十円で卸して欲しいとの話があったはずである。確かに彼女の栞は、一流デパートから売り出しても、恥ずかしくないほどの品だった。だが彼女はこの話を断わった。これは彼女の贈り物であって、売り物ではないというのである。決して豊かとはいえない彼女が、これを断わった話を聞いた時、わたしは深く感動したものである。この十字架の栞を受け取る一人一人には、小さな贈り物かも知れないが、彼女の働らきは真似のできない、大きなものだといまもわたしは感じ入っている。

「人にはできないことも、神にはできる」（ルカ伝一八の二七）

わたしたちは、この聖句を書き添えて小川さんからの栞を多くの人に贈った。

二

しかし、世は様々である。わたしたちの結婚に対して、小川泰代さんのようなお祝をくださった方もあるし、次のような手紙をくれた人もあった。

ある日部厚い封書が配達された。それは、懐しい教え子の桜井良也からだった。彼は、わた

しが十七才に満たぬうちに、炭礦街の小学校教師になった時の、高等科の生徒だった。わたしとは四つしか年が違わない。教師たちより大きな体をしていたが、明るく無邪気な生徒だった。一緒に歩いていて、わたしが疲れると、

「おぶってやるか、先生」

と、声をかける生徒だった。わたしが旭川の学校に移ってからも、よく遊びに来、療養中も度々見舞に来てくれた。

「ああ、よかった。まだ生きていた。ぼくね、先生の家が近づくと、もう死んだのじゃないかと思って、胸がどきどきするんだ」

よくそんなことをいう良也だった。

わたしの臥ているうちに、彼は大学を出、東京の大きな会社に勤め、妻をめとった。出張先から人形を送ってくれたり、箱根から自分の名とわたしの名の入った楽焼(らくや)きなどを、送ってくれたりもした。

札幌の医大病院にわたしが入院していた当時、彼は東京から来てくれたことがあった。のっそりと病室に入って来て、わたしの顔をみるとニコッと笑い、

「ああ、まだ生きていてくれた」

と、安心したように椅子(いす)にすわったかと思うと、そのままわたしのベッドに頭をつけて、ガ

アガア大きないびきをかいて眠ってしまった。長旅の疲れが一時に出たのだろう。
二時間近くも眠って、やっと目を覚ました彼は、わたしの床頭台の中を探し始めた。
「何かうまいものはないかなあ」
見つけ出した蜂蜜をコップに垂らし、それに水をいれて、ごくごくとのどを鳴らして飲んだ後、彼は照れたように言った。
「なんだか見舞われに来たみたいだな。先生、足の爪を切ってあげようか」
「汚ないから、いいわよ」
足の爪を切ってくれるなどという見舞客はめったにいない。わたしは、彼の思いやりがありがたかった。ギプスベッドに臥たっきりのわたしは、足の爪を自分で切ることはできなかった。
「汚なくたっていいさ。ぼくが切ってやる」
彼は気軽にそう言うと、バケツにお湯を汲んで来てわたしの足を拭き、爪を切ってくれた。
この桜井良也からの手紙だったから、結婚を祝ってくれる手紙だろうと、わたしは封を切った。ところが、いきなり目に飛びこんで来たのは、
「奇蹟を呪う」
という言葉だった。
「先生、ぼくは奇蹟を呪う。ぼくにとって先生は、異性でありながら異性ではないという、唯

一のふしぎな存在でした。その先生が結婚してしまった。ぼくにとって、先生が特定の人の恋人であったり、妻であったりすることは、考えられないのです。先生だけは、永久に誰のものでもない女性なのだと、ぼくは信じて安心して来ました。再びぼくは言います。ぼくは奇蹟を呪う、と」

手紙は長々とつづき、彼らしくない恨み言に満ちていた。わたしは、再び三度読み返した。彼にとって、わたしは生きている限り、病人であるべきだったのだろうか。彼がいつ訪れても、ギプスベッドに臥ているわたしは、留守であることはない。彼は会いたい時に、いつでもわたしを訪れることができた。そしてわたしは、何時間でも話を聞いてあげた。

それはともかく、長い病床にあったわたしが、少なくとも桜井良也にとっては、心の安らぎだったのかと思った。病人であったということも、満更人の役に立たなかったわけではなかったとも思いながら、三浦に手紙を見せた。

「かわいいな。こんな祝い方もあるんだね」

と三浦は微笑した。

その後のわたしたちの家庭にとって、少なからず重大な影響を及ぼすに至った手紙を、わたしはもう一つ、どうしてもここに紹介しておかなければならない。

それは奇妙な名宛の封書だった。名宛は、「堀田(三浦)綾子様」となっている。裏を返してみ

るまでもなく、友人である医師の国村則雄の見馴(みな)れた筆跡であった。

彼は、わたしの療養中知り合った医師の一人で、初めて会った当時は、まだ医学生であった。彼は昭和三十年の八月初旬、突然わたしを訪ねて来た。アララギでわたしの短歌を見て、訪ねたのだという。すらりとした色白の、どこか憂鬱そうな学生だった。伏し目勝ちで、視線を合わすことは少なかった。一度もクシを入れたことのないような髪だった。笑うと意外に人馴つこいまなざしになった。

彼は、初めて訪ねて来たその時、わたしの女友だちのうわさ話をした。

「あの方の耳はどうなさったんですか」

その友人は美しい人だが、耳は少し異形(いぎょう)だった。とたんにわたしはぴしりと言った。

「わたしは、わたしのお友だちの悪口を聞きたくありませんわ」

「いや、ぼくは……医学生として知りたかったまでです」

わたしの強い語気に驚いて、彼はどきまぎした。その友は、わたしを既に去って行った友だった。わたしのことをあれこれ言いふらしているというわさも、わたしは聞いていた。だから多分、国村青年もその女性からわたしの悪口を聞いていたにちがいない。彼としては、その女性の異形の耳を話題にすることによって、わたしに好意を示すつもりだったかもしれない。しかしわたしは、自分を去って行った友人とは言え、彼女を悪く思うことはいやだった。

初対面のわたしが、きびしくびしりと遮ったこの言葉を、しかし彼は素直に受けとめてくれたようである。彼は夏休みの間、幾度も見舞に来てくれた。札幌の彼のリーベと約束した帰る日が過ぎても、彼は旭川にとどまり、わたしを見舞に来た。夏休みの間に、彼はすっかりわたしの親しい友となり、何かと隔てなく話し合うほどになった。わたしより八才も年下の青年だった。

彼には女友だちがたくさんいて、彼を慕う女性が絶えなかった。わたしはいつの間にか、その女性たちからも、時折り手紙をもらったり、見舞われたりするようになった。多分、わたしが彼の姉のような存在として、彼女たちには映っていたのだろう。

この国村青年が、三浦に初めて会ったのは、わたしの病室でであった。彼が来ている所に、三浦が後から来たのだ。彼は珍らしくその日は饒舌だった。一時間程して、三浦は先に帰った。すると彼はふいに無口になり、帰り際に、

「ぼくはきょう、精神状態が悪かったようです」

と言った。彼は、三浦の人格に嫉妬したのだという。

「そうね、わたしも三浦さんの人格には、嫉妬を感ずるわ」

それから何年かたち、いよいよわたしたちが結婚することになった。親しい友人の中で、この結婚に反対したのは、国村青年只一人であった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com